■陵東遺跡出土の埴輪■

陵東（みささぎひがし）遺跡は、羽曳野丘陵（はびきのきゅうりょう）北端の谷の中に立地しています。

おもに古墳時代から古代にかけての成果が得られていますが、古墳時代後期後半の溝がとくに注目されます。

「1058」と名付けられたこの溝は、段丘の地形に沿って南東から北西へと延び、幅は２メートル、深さは１メートルの規模がありました。

遺跡の周囲には水田が拡がっており、溝 1058 は、水田に水を引くための水路であったと考えられます。

さて、この溝の中には、力士、盾持人（たてもちびと）、男子、石見型盾（いわみがたたて）などをかたどった埴輪や、筒形（つつがた）土製品が据えられていました。

力士などの埴輪は、わざと壊したうえで、また、何度かにわけて、溝の中に置かれたと考えられます。

こうした状況からみて、埴輪を用いて溝の中で行われた一連の行為は、水田耕作にともなう祭祀であった可能性が想定できます。

出土した埴輪は、その特徴からみて、５世紀後半に製作されたと考えられます。

溝が掘られた時期は６世紀後半ですから、約 100 年の時期差があります。

溝の中に据えられた埴輪は、いずれも、当初は古墳に据えられていた可能性があります。

古市（ふるいち）古墳群とその周辺の開発の関係性、そして祭祀のあり方を考えるうえで、興味深い事例ということができるでしょう。